

私はこれまで生きてきた二十年間の月日の中には、どれだけ多くの人との出会いと別れがあったであろうか。出会いと別れを経験したことで、私は自分の中に揺るぎない看護師という夢を持つことができた。これから今の自分を支えている二人との出会いと別れについて述べたい。

まず、私が看護師を志すきっかけとなった叔父との別れについて述べたい。別れとは思いもよらないような瞬間におこるもので、昨夜はいつもと変わりなく元気な声を聞かせてくれた叔父が、翌日には二度と会えない存在へと変わってしまった春の日。叔父の死はあまりに突然すぎた。明日が来ることが当たり前で、自分には遠い存在だった思っていた死を目の前で実感して初めて、人間の命はこんなにも儂いもので、生きているということは、いくつもの偶然が重なった奇跡のようなものなのだ実感できた。その日をきっかけに、白衣の天使という言葉がぴったりで漠然と憧れだけで看護師を夢見ていた自分と決別することができた。看護師は生と死が混在する医療の現場で、闘病中の患者さんの希望の光となれる尊い存在だ。生きたくても生きられなかった叔父は、もっと伝えたかったメッセージがきっとあったと思う。だから生きようとされている患者さんの想いやニーズを最も身近でくみ取り、生きていることに喜びを感じてもらえる手助けができるような存在となり、生命を支えたいと思うようになり、看護師を志すようになった。

次に、私が実際に看護師となり、初めて受け持たせていただいた患者さんとの出会いについて述べたい。この患者さんとは、現実を受容しきれずに感情失禁がみられることもあった不安定な時期に出会った。それにも関わらず、笑顔で私をいつも迎えてくださり、患者さんのありのままの思いを、まだまだ拙い看護技術や知識しか持たない私に話してくださった。そんな患者さんに私は何ができているのだろうかと苦悩していた時に、「あなたの明るい笑顔と優しさが私の励みになっています。どうぞ立派な看護師さんになってください。」という忘れられないメッセージを頂いた。その時医療従事者として、一人の人間として尊重して接していただけることの、何事にも変えがたい喜びを感じた。同時に、これから先出会う患者さんと接していく上での根本に気付けた出会いとなった。

生と死を身近に実感しながらの看護師という職業を志したからには、これから先、辛い出来事や苦勞が待っていると思う。それでも自分が信じた道、自分で選んだ道を誇りと感謝の念を抱いて進んでいきたい。